

①

(表紙) 江の島日記

さいつ頃、母君鎌倉鶴ヶ岡八幡宮より江の島
詣でせさし給ふ時の道すがらの名所古跡

の御物語、珍らしきことゞもにて、よき折もあらば

参けいいたし度、年月思ひ居候所、はからずも

清川氏のさそひにて、卯月十二日、新橋ステムシヨより、

八時十五分の車にて神奈川へ九時過着、神奈川

台を過て茶店に休、人力をやとひ、戸塚くらやにて

中食、此所二階見はらしよく、しばらく休、

此所を出て藤沢遊行寺裏門迄車にて、夫より参詣、

寺内所々見物、かた瀬祖師堂へ参けい、七面山へも

参けいいたし度と思ひ候へとも、此所石坂まがりく

数多く、あまり高きゆへ、下にて拝し、御若き

御方々はいさぎよく石坂を御登り、半より

腰をおして御もらい被成候方も有、又供之者の

草りをかりて御下りの御方もありて、この身は

高見の見物にはなして、下より見上候処、一しほ

おもしろく、此所を立出、かしわやと申茶屋にて

やすみ、此家ふしんもきれいにて、三階より所々

一覽、ことゞく目先替り、景色何ともいわんかた

なくしばらく休、もはや島へは程近しと、皆

さいつ頃：「先つ頃」の音便。
先ごろ、以前

母君：義母（姑）のとももの事

清川氏：奥医師清川玄道
（旅行同行者はその妻）

人力：人力車

戸塚くらや：（特定できず）
戸塚宿通りの西側山手にあ
った茶屋か。

片瀬祖師堂：龍口寺本堂
七面山：龍口寺七面堂のこと
か

かしわや：片瀬龍口寺門前に
あった茶屋。三階建てで見
晴らしがよかった。

とりぐの咄しながら、永き砂山もいつかこして^越
 浜辺へ立出、又此処のけしき^{景色}、波のうち^打寄る
 さま、いかにも珍らしく、すこし物すごくも
 おぼへ、今宵は波音みくに付、ふし兼候などゝ
 かたり^語て、江の島立花やへ五時過着、此日は朝
 より小雨に候へども、かく別障りにもならず候、日暮
 よりつよく降、二階より所々の景色詠、又雨の
 けしき一しほよく、此所庭内にすこし小高き
 所ありて、めさし紅葉・さくらいまさかりにて、
 風につれ、浜辺へちり行さまいかにも見事にて、
 思わずも

うち寄る 波のこへ行 桜哉

扱、此茶や清川氏年月なじみの所にて、
 殊之外のもてなし、上段之間へ通し、夫々
 あいさつに出て、其内風呂かげんもよきとて、
 ゆかた持来り、追々入湯もすみて、直にてうし^{銚子}・
 盃・膳部、其外肴持出、誠に肴あたらしく、しばらく
 さかづきをめぐらし、家内之者も出て種々
 取はやし、支度もしまひ、雨はしきりにふり
 さみしく、三味せんをかりて、つめ引も有、
 楽寝^{らくね}いたすもありて、皆々思ひくと咄し
 にて時うつり、九時過ふしどに入、夜具等も
 ことぐくきれいにて、先に思ひし波音も少しも
 みくに障らず、よきこゝちにふしぬ。あくる十三日

立花屋：（特定できず）

て：「て」に似ており、意味も通るが、読点の記号かもしれない。

てうし：銚子

膳部：膳にのせて出す料理。食膳。

楽寝：のんびりと気楽に寝ること。

③

七時過おき出、あちこち明て詠候処、殊之外
景色よく、もやふかくかすかに山もみへ候様、
しばらく過て朝飯、一寸一口等誠によろしく、
支度もすみて、此家俵案内にて御山まいり、
石坂多くまがりくゝて参けい、岩屋近き処
茶屋にて休、自分は差つかひにて、岩屋へ参けい
出来兼、茶店にしばらく待居、あちこちと
詠つゝ、岩間へ波のうち寄るさま、はるか
海中にゑぼし岩とて高さ五丈計も有
よし、りやう舟なども出居、色々珍ら敷
ことゞも、もやふかく、かすかに山もみゆる様に
思われ、其内雲もうすくなり
もや晴て みれはそこなり 春の山
などゝ寝ごとうかみ、其内皆々此処へ
帰り、岩屋の咄しも承り、此茶屋にて御穴
いわひとて、小さきだんごくしへさし、人々へ
御いわい被成候とて差出し、中には田舎より
参けいに参り候ばゝあ等は、そんなだんごは
家でいくらもたべ居候などゝ申、ことはり候も有、
とりぐゝにておもしろく、一同右だんご、さざい坪焼
等にて、茶くみかはし、(名脱力)残りおしくも立花屋へ
十一時頃帰る。此処にては三階へ通り、夫々待受
いたし有て昼支度、貝細工など取寄、土産物
調、一時過此家を立出、ぶら／＼浜辺をあゆみ、

一寸一口

差つかひ

御穴いわい

さざい::さざえ(栄螺)の音便
坪焼き::壺焼きの当て字

七里ヶ浜へ出る。此処けしきよく、欠石等も

ひろいて上の茶屋へ休、こゝにて鎌くら八幡前

まで車をやとひ、車夫名所古跡の案内

して、道すがら極楽寺と申寺有、此門内

両がは桜あり、いまを盛りにて、此さくらは八重

ひとへと申伝へ、一本にて両用咲くよし。夫より

朝比奈切通しへかゝり、此処車にてはこし兼、

あゆみ、よほどの難所にて、皆々くたびれ足にて

こっけいもあり、よふくとかうもりをちからに

こして、又車にて道すがら、はせの観世音

へ参けい、此仏体三丈三寸と申事、大仏へも

参けい、此近き所にはせを翁よみ候

夏草や つわ者どもの 夢の跡

と申碑有よし、車夫申候。程もなく

八幡前へ立出、御宮へ参けい、けいだいもひろく

御宮もこふくといたし、かねてもとふとく覺、

むかし此処にて兜あらため御座候こと等と

物がたりして立出、もはや暮近く、車を

いそがせ、金沢東屋へ七時頃着。此所相とまり

多く取込居、よふく座敷へ着、其内湯之

案内もありて追々入湯いたし、二階よりあち

こちと詠、空もくもり、折々晴間より月も出、

直前に入江有て家根舟うかみ、ほのかに

おぼろ月うつり、景色いたってよろしく、

追々支度もすみ、九時過ふしぬ。此家随分

欠石…

八重一重…一つの枝に八重、一重の花が咲く。

朝比奈（切）通し…極楽寺切通しの間違い。

かうもり…こつもり傘のおと。杖代わりに用いたか。

兜あらため…仮名手本忠臣蔵

相とまり…相宿のことか。

屋根舟…屋根板が葺いてある小舟。大型の屋形船と区別した呼称。「やねぶ」とも。

⑤

ふるく少々まがり居候こに思われ、夜具等も前夜

とは大ちがい、コツくにてきみわるく、とりくぐ咄し

して、一しほ汐き興ようをもよ催ふし、あくる十四日

晴、六時頃おき出、夫々支度済、八時頃立出、直に

横浜迄車をやとひ、道すがら能見堂茶屋

にて休。此処老母八景の案内可致と、能見堂へ

上り、遠目がね取出し、夏島・猿島・系さぼし

島其外色々と物語承り、此所を出て十一時

過横浜へ着、夫より汽き車にて一時過、采女うねめ丁

清川氏へ帰る。

母君は歌の道ま学なび給ければ、江の島

道の記、名所古跡にて歌もよ詠ませられ、

道すがらのことまづも心のま書ゝかゝせ

られ、一しほ汐おもしろきことゝ、此身も

色々珍らし（き）所見物いたし候まゝ、認したため

置たく思へど、何もわきま弁へなく、殊に

筆もまはり兼、只々見物いたし候俣を

後の楽しみにもと書記しるす。

明治十三年四月十二日

ひと杉

たき

て：「て」に似ており、意味も通るが、読点の記号かもしれない。